28　天保五年　花供養

底本　白鹿記念館本

校異　月明文庫本

花供養

（表紙・原題簽）

（表紙見返し）

東山芭蕉堂に毎年
花供養あり。そも此供養に
捧る花は、風雨をいとふの
さわりもあらず。もろ国の韻士、
翁の像前に備へんとの
花なりけり。されば、月の夕べ、

序一オ

雪のあしたに芳ばしく、
咲も残さず、散もはじめず、
この営の年／＼に盛なる事、
蒼虬老師のいさほしなるべしと、
竹酔叟太老堂謹みて誌す。
天保五午晩春

序一ウ

さつとした逃挨拶や花のなか　霞柳

水の澄む間も見えぬ鮎汲　蒼虬

焚たての飯に青海苔ふりかけて　芹舎

こける障子に首をちゞめる　杜蓼

しづまらぬ竹荷の跡の土埃り　金菜

近処だけする七夕の礼　南渓

降かねて月の出て居る塀のうへ　貨僕

かる一段になりしはや早稲　並隆

一オ

預つた子もそれなりに貰ひきり　月峰
　花瓶のもりに手をあてゝゆく　凡鳥
間柱のくちてあぶなきおく座敷　振々
　髪くる／＼とむすぶ関前　若雅
着るたびに襟のしくつくぬき紬　岱年
　うごかずに居る芍薬の蟻　梅通
表向昼は出られぬ病気ひき　杜鷲
　見たやうである伊賀の小飛脚　伴橘
麩をふんだ足のひやつく暮の月　梅價

一ウ

きのふの汐で鳴むしもへる　岱美

薄葉だけ別にしわける若たばこ　酔露

だれにも見せぬ京行の金　衆芳

不掃除な角行燈のにた／＼と　羅浮

常に小言のたえぬ網本　喜楓

二度まきの麦も大かた生揃ひ　馬友

借ては済す葬の脇ざし　祖郷

わるくさき茶漬の菜のしほがつほ　青可

槻の角のうれぬ軒下　正阿弥

二オ

披露せぬ聟も出て来て涼まるゝ　芳英
近うきこゆる雨乞の鐘　乙雅
炮碌の土もだん／＼取つくし　太老
根太の膿のかほへとばしる　馬角
昼すむと火の気もおかぬ台所　玉双
呉れると直にすぐる青藁　光影
肩のよい法会／＼の天気まん　夢外
ぽつり／＼と出来る石垣　よう
夕月のうつれば鳰の巣に戻り　百池

二ウ

はいて間もなく汚す夏足袋　瓶山
さつぱりと鞠に入たる一身上　朝陽
眠たくなれば何処にても寝る　恩古
汐ぬれのまゝでつくねし小風呂敷　烏都雄
よろこび鴉はやうからなく　魯斎
どさくさとさて夜登りあへかへし　蘇山
油断した間にあがる蒸もの　李角
帯の端ふまれて居るも気の付ず　栗哉
淋しうおもふ茸がりの月　風阿

三才

家しりにほちつく音もおとし水　田美
虫をふるふて茹る中祓　翁杖
陰口をしかられながら言出し　淡斎
ね台直すあさ／＼の役　草鳥
さく花に御室の用事こしらへて　柴人
餌のきれたやうさはぐ駒鳥　執筆

右一順

三ウ

たのしみのせんぐり出来るさくらかな　近江西湖卜斎
葉ひとつでかゝえておちぬ椿哉　カタヽ　世岐
人ちら／＼花ちら／＼と知恩院　ヽ　花園
竿竹を渡していやし門の花　ヽ　成章
はつ午や京でわかれし人にあふ　タカシマ湖郷
不足なき花当分のひより哉　ヽ　朗月
春雨やゆふばへしたる湖の降り　ヽ　五車
鳩一羽何処からか来て霞けり　五十川　白司

四オ

木まくらの寝にくき宿やうめの花　五十川　鶴丈
寝て居ても気ならず花に雨二日　日爪　舞雪
わか鮎や恩にきせたる持て来やう　マノ　江亭
籔のある間雪ふむ余寒かな　川シマ　松月
鳴止だ黄鳥のぞく素足かな　丶　嗽石
水主銭もましてやりけり朝がすみ　大ツ　蕙布
摘いそぎして屑にするわかな哉　太田　麦村
さく花や嵯峨は人気のよい処　ハラソノ漁村
駕の衆のおきどころなきさくら哉　浅小井烏都雄

四ウ

人になれて犬も夜を寝ず花の中　マキ　二江
うつくしう日はくれにけりはなの雨　湖東　月洗
何処やかや往て世話しき弥生哉　シガラキ楓下
から川を人のとほるやうめの月　八マン素白
うぐひすやおもひのほかに茨の中　丶　四明
はつ花やちかくてつひに来ぬ所　丶　太令
ひく枝のほかがかくる也ふぢの花　芋丈
野も畑も見て来て門の薺かな　ヲイソ其半
春かぜや辷たなりにかはくみち　江ガシラ湄南
五オ

山傍において長閑な家並かな　　丶　洞居
ちるかたへ目のついてゆく桜哉　　ワラソノ鹿雄
葉も花と見る夜ざくらの明り哉　　丶　一化
うめの花貰ふ間も春ながし　　仁正寺一嘯
立替り見るやはな見の宵の空　　丶　たを女
舞ふ雲雀けぶるたばこに見失ふ　　丶　南茂
ものおとは皆片付てはつがすみ　　丶　布菫
出代の当座ちひさう居りけり　　日ノ　木壺
さゝやいて花見誘ふや中暖簾　　敬之

五ウ

眼に見えてはるのへるなりちるさくら　葛マキ里童

咲揃ふまではひさしやうめの花　ヒラツ亀甲

言伝のよくとゞくなりゆふがすみ　大溝　麦洋

分入て方角しれず梅林　タカミヤ里龍

明星のきはまであげる雲雀かな　四明

うちさしてある山間の畑　可大

落つきの愛相に干鱈むしらせて　明

おも家へゆくと誰もかへらぬ　大

六オ

不断より市も賑ふけふの月　明
さつと通りて野分しづまる　大
稲を刈うちは馬にも古荷鞍　明
黙つて居ても人のうやまふ　大
勾当は一代きりの小銭かし　明
はたが邪魔して娘もどさぬ　大
火のきえた巨燵にちよつと寄かゝり　明
浅黄に雲のうつる水海　大
生物も野菜もはしる朝の月　明

六ウ

相撲櫓の太鼓見あげる　大
秋さぶく成て頭瘡のかはくなり　明
仏きざんだ屑もふまさぬ　大
袖乞も花に洗濯袷着て　明
のびるひさしにちさき罔両　大
手盥へ五加木の茹湯のけておき　丶
負ふ子抱く子に嚊のまめやか　明
駕の前泣つ笑ひつかしこまり　大
近江のわか葉美濃へ吹るゝ　明

七オ

つゝかれていかる毛虫の歩行ざま　大
　豆鉄炮もうれぬ雨ふり　明
神棚の明りで飯は食仕舞　大
　いらぬ普請にいたむ内証　明
瓜茄子鉢へうゑたも種になり　大
　きくをほどこす親の精進日　明
出る際にしばらくくらき月の空　大
　旅のはなしにたびをわすれぬ　明
眼を閉て薬まるめる手のかげん　大

七ウ

隣とこちと犬も中よき　明

うつむけて舟まで蜑の虫ばらひ　大

茶釜のしたをいつもけぶらす　明

ついそこの花も見る間のまれにして　大

はるかにかすむさとの人声　明

鰐の尾の永き日すがらほうら／＼　ミノ大ガキ雪荷

何をしてはる／〻＼ゆくぞ揚ひばり　〃　草莱

たゞでさへ気のうかるゝに蝶の飛　〃　梅翁

八オ

はかどらぬ女道者や木瓜の花　ヒラヲ南弓
じり／〻＼と日のくれこむや霞む中　ヲハリ沙鴎
塀合を出てまちあはす花見かな　〃　而后
花の中人のたちよる老木かな　〃　黄山
灯台に来ては戻るや花のかぜ　〃　梅裡
かよひ盆出して受るやちるさくら　〃　我責
とりまぜた挨拶もなし花ざかり　〃　金樵
すつくりと脱だ着物やはつざくら　〃　素汀
一道者とほしてあげるひばり哉　〃　李曠

八ウ

麁朶一把おこしてとるや蕗の薹　　、　市雪
先へ来た人のあしらふ礼者哉　　、　雨鳥
貰ふて来た根もほどかぬにおち椿　　、　思文
しつたかほばかり残りぬくれの花　　、　烏津
横町に擔桶ならべるや花ぐもり　　、　卉青
乗ものゝまはらぬ庭やはなの雨　　、　桃鳥
かくれ場も見えぬ河原や走る雉　　、　青可
はる雨や泊た寺で好みくひ　　、　夙也
麦一穂のびた小坂やはつざくら　　、　一雄

九オ

方角のきまらぬかぜや花のなか　ヲハリ秀外
はつ花や埃りおさへによきしめり　〃　蓬陽
見たうちの一番木なり谷の花　〃　路舟
出用意をして居る朝やはなのちる　〃　箕風
生かえて莟にするやうめの華　〃　蘭皐
昼飯の済だ気で居る接木かな　〃　可彳
子に先へもたせて遣るやいかのぼり　〃　木儁
二度来ても留主でとられず蕗のとう　ミカハ卓池
食つみの方／〃／にある宿屋かな　〃　波文

九ウ

引て来てみれば皆よき小まつ哉　　丶　五蓼
潜る気でとほればたかき柳かな　　丶　流芝
花の友町出はなれてそろひけり　　丶ヨシダ三岳
休むより歩行に眠し芽花時　　丶　蓬宇
戸をさして隣あそびやもゝの花　　丶　玉養
くたびれて寝る日も華の日数哉　　ミヤザキ陽坡
ものいはぬ人の残りて花見かな　　遠州原川可月
えだのある箸で物くふ花見かな　　丶　呼卵
敷ものをふるはで戻るはな見哉　　カタセ竹里

一〇オ

更て子をすかす門ありおぼろ月　渡瀬　友之
狩あたるさくらや急に腹のへる　〃
庭鳥も昼眠りするはるの雨　〃　居風
あらいそのしずまるあとや春の月　飯田　且月
折かけて持てあましけり藤の花　イマキリ一炉
日によつて梅は寒けしあたゝかし　〃　東草
朝の花雫のゝちにちりにけり　ヨコスカ亀巣
花の山一日あるき余りけり　〃　峻路
をりかねる手へ月のさすさくらかな　〃　万年人

一〇ウ

都への文もとゞけよはるの雁　スルガ　巴明
魚町にうろここぼれてはるの月　〃　漣山
さくらほどちる花はなくおもひけり　〃　託堂
永き日をむざと眠るや供の者　御厨　黄山
狼を聞た夜もありはるのやま　〃　沢先
蝶〳〵にみちをとられて見て居たり　〃　竹外
くさの戸にさだまる花のはなし哉　甲州市川石郷
うぐひすやかほ見せた日は鳴かでゆく　ニラサキ六坰
万歳のあふぎはまつの葉ごし哉　相州江ノ島扇風
一一オ

かりそめの夕月ならずうめの花　　、　漣月
人ごみや花持てあます奥使　　江戸抱儀
不器用にみゆる長男の手まり哉　　、　雨邨
気のつかぬ処へもりけりはるの雨　　、　のぶ女
普請中となりをかりる燕かな　　、　てい女
かけ茶やの場処を見たてる柳哉　　、　桃機
見ておいた家のうれけり梅の花　　、　霞兒
間違てはいる小路や木の芽垣　　、　白起
うち外へおちてもへらぬつばき哉　　、　壮貲

一一ウ

はるめいた料理のさぶし梅の花　一楼
鶏の眼のさめればゆれる柳かな　丁知
はたけまで出かけて来たりとまり雉　雪丸
しら雲と別になる日やちるさくら　詠帰
どう見ても柳は雨の木なりけり　梅峰
饅頭のふみ付てありはなの山　蘿斎
小座しきは花見た客の鼾かな　仙骨
しのぶまの大きな声や猫の妻　五老
早う見に下戸をやりけり花の山　竹外

一二オ

まいら戸にかげさすうめのかほり哉　江戸得蕪
おちあふてしづかになりぬ春の水　〃　雨什
あやにくに訪ふ人のある接木哉　〃　平出
うぐひすや窓を覗て人の訪ふ　〃　鳥年
船頭の薺はやすやときはづれ　〃　猶麻
用に出たなりで梅見にまじりけり　〃　柳圃
並松や花のこゝろのうつりゆく　〃　ちかき
折までの慾とはしつて花貰ひ　〃　怡兮
見る外に思案もつかず花の中　〃　多希志

一二ウ

さし木してさてたのみある月日哉　〃　兎玉
屋根替にかけた階子も霞けり　〃　其笑
駕に居て蕗の芽見出す立場哉　〃　松什
気のつかぬ見どころ出来て花のひる　〃　護物
下駄がけや花の近所の人らしき　〃　小柯
行春や酒をまつまの空寝入　〃　与翠
雪解やころぶなといふくちの下　〃　八十女
おぼろ夜やつもりやうなき池の水　〃　龍石
指をるやところ／〃＼の花の順　〃　何丸

一三オ

かたよらぬはなのくばりや垣の梅　江戸英山
行灯で済ます客なり花ざかり　〃　有月
木母寺の花にうかるゝとまり哉　〃　卓郎
出直して見ればさくらのちり支度　〃　暁河
油断なくまはるや雨のあとの花　〃　惟草
しぶ〳〵とあがりて花の天気哉　〃　雲山
下戸までが酔ふたふりする花見哉　〃　完哉
ぬけがけの手柄みえけり朝ざくら　〃　竹甫
ちる花のひとつふたつの夜明かな　〃　粗文

一三ウ

花提て通ればせまき堤かな　丶　来先
田のうへやさし出し花になく鴉　丶　庚年
大かぜのあとやしづかにちるさくら　丶　連管
見たやうなかほではあれど花の中　丶　春路
雫したあとをさくらの匂ひかな　丶　万久
水おとの遠くきこえてきじの声　丶　来至
黄鳥やこゝも上野の山つゞき　丶　大梅
猫の恋ひと夜添寝もせざりけり　丶　由誓
境内のゆきどまり也梅一木　丶　禾木

一四オ

養父入の土産そろひて宵寝哉　　丶　寿堂
日ぼこりの眼にたつ筋や梅の花　　丶　荷堂
柴の戸やうぐひす一羽むかしから　　丶　一具
田にすればなるかゝえ地に梅柳　　丶　梅室

翌は上野へ杖をひかんとおもふに

寝て居ても枕うごくや花ざかり　　詠帰
くさめすぐるも蝶鳥の中　　五老
公家衆のたばこのまるゝはるかぜに　　仙骨

一四ウ

障子あければ舟着てある　蘿斎
月の雲皆遠山へたゝまりし　竹外
たれがはらにも秋はいつぱい　帰
嫩なるくさゝへ露はもちにける　老
袴などはく人は来ぬ庵　外
猪も念仏のこゑはきゝたいか　帰
まつの火ほそくかきおろす轡　骨
かぜにちり風にまたるゝ木の葉にて　斎
たがひに探りよれば侍　帰

一五オ

拝殿で月の出るまではなす也　外
　そよぐもの皆すゝきとぞしる　老
こゝろさへ質にやりたき秋なれや　骨
　嵯峨に居るうち酒をたしなむ　外
花見にと来る人をよく持てはやし　帰
　刀なんどはいらぬはるの夜　斎
造作なくとれた無尽に蛙なく　外
　早稲田の町の西さかりなる　骨
兄弟でけふも一日くるまおす　外

一五ウ

重箱といふ娘かほ出す　帰

ほとゝぎす雨のふらぬが恨にて　斎

通夜してもどる唐崎の神　老

世に合ぬ人としば／＼柴をもし　骨

はつ雪ぞとて牛もやすませ　斎

鎌倉のころの出ものかしてやり　老

あすからはは や出家三昧　外

月を羽にのせてわたらぬ雁もなし　斎

叺のぬかをはかるあきかぜ　骨

一六オ

ごちや／／と小菊咲たる宿とりて　外老

山から出る水のうつくし　帰

玄賓の死れたやうにしにたがり　斎

竹の火箸をおし曲ておく　骨

雨がちに春も過ゆく遅ざくら　帰

苗代せよとつゝ鳥のなく

絵紙などはる小座しきや桃の花　武越ヶ谷柳翠

住安う見えけり桃にたつけぶり　白甫

一六ウ

もゝ咲て艾のにほふ庵かな　一石
居酒屋は豆腐ばかりやもゝの花　槐雪
気が付て撞仕舞けり春の鐘　素蓮
桃の中出てから雨の降にけり　麟定
行道のなくて戻るやもゝの花　氷佳
もゝの花草履のおもき砂地哉　四友
鍬さげて来たのか桃のあるじ哉　千丈
鶯やすゞめに少しほそいかげ　月貨
見つめれば花にあはれのおこりけり　羽生棠功

一七オ

かた岨やさくらをるにはむつかしき　丶百間徐松
連翹をかぜのはなるゝ小昼かな　房州　鳥周
黄鳥のかげも見せけり大堰川　上サ　木葉
うぐひすや高音済して安堵がほ　下サ　桐雨
北山のくもりとれけりきじの声　丶マツド南渓
寄て居た魚のちりけりおち椿　丶　菁莪
一浜は漁に出払ふかすみかな　植房　梢山
昼過になれば蝶こすながれ哉　ツクミヤ可逸
戸明れば田ばかり見えて春の月　タコ　之桂

一七ウ

折ごろの二日もおそし籔のうめ　丶水海道紫峰
わたしから犬追もどす花見かな　丶　山馬
今一里ゆけば京なり春の月　丶　慶寿
持直す日和先よりきじのこゑ　マセ滄水
行どまるみちとは見えぬ柳かな　ヒタチ孤朱
戻りにと言葉かけるや蕗のとう　丶　一兆
畑うちの口かりてすむ関処哉　丶　野巣
むかしからこのくらゐある野梅哉　上毛タカ分尾
さはがしや隣のはなにとしのよる　逸芟

一八オ

宿引の大事気にもつつゝじ哉　惣社酣古
真黒にわかくさ見ゆるくぼみ哉　可布
かれ柴に雨具たゝむや鳴ひばり　下毛足利嵐斎
一枝は愛相にもをるさくらかな　〃トチギみち雄
蝶にあふてこゝろ嬉しき峠かな　〃　葛堂
挑灯が先にもたらす花もどり　〃　賦三
花のこと牛の来るたびたづねけり　〃　平山
往還もせまし大かた花もどり　〃　静堂
ちる花をかぜの又せく水のうへ　〃　董湖

一八ウ

春の夜や鼠のおちし桶の水　信州鵑村
若猫や笹が吹ても飛で出る　〃　叢
虫啼た縁もある野や菫さく　〃　四方丸
梅ほめて居ればくれけり莨の火　〃　飯田素風
夕ぐれや梢にうごくいかのぼり　〃　路橋
正月も月夜となりぬうめの花　〃　素嵐
炭屑にまじりてあるや梅の花　ヲク福シマ江三
はるかぜや男の笠の風ぐるま　〃　桂裡
うぐひすやそっとはあかぬ蔵の鍵　〃　大費

一九オ

初ざくら来るや魚荷の小付にも　二本松乙調
いち高い処に隙とる花見かな　杉田英泉
灯ともせばはし近になるさくらかな　五戸文喬
青柳の小家へもどる筵かな　会津坂下再児
谷／＼の闇をあつめて帰る雁　〃　斗南
ふりかへる女ごゝろやしほひがた　〃　茶三
蛙なく田を持ながら宵寝哉　〃　五龍
草の戸や蝶にもならで古雛　南部松岿
はつ音して黄鳥もうれしさうな顔　〃　吐屑

一九ウ

山門を明におりゆくかすみかな　越後水沢ちから
長湯するくせの出来るようめの花　〃糸魚川曳尾
うめさくやあたゝかみある宿の下駄　〃　保右
むだ歩行するや雪解の廻り道　〃　宜雨
大事がる花のながめもおもくろし　〃　三甫
万才の扇たづねる戸口かな　〃　其誠
きく苗に付て来てさく菫哉　〃ヨイタ杜皐
沖鳴の下へまはるやかへる雁　〃ミツケ宇弘
くれがたにひとかぜたちて初桜　〃　北洋

二〇オ

夜ざくらや折にさはれば鳥のたつ　丶タカ田甫十
きじなくや陵守のあさけぶり　丶ノ田　可得
惣菜もなくて余寒の唐がらし　丶六日町伊松
なの花のはてや米つく水ぐるま　丶シラ子蕗村
むしりても／＼出るつくし哉　丶　一水
なの花にさそはれさくや権大根　越前丸ヲカ古眼
ともし灯を見つめて居れば鳴蛙　丶　友圃
陽炎や尋て歩行料理ぐさ　丶三日市恕兮
きじ鳴やゆふ日のうつる浦の松　丶滑川　子光

二〇ウ

一処へふたつおちたるひばりかな　　文和
鳥居から花見ごゝろに成にけり　　砂子坂克亭
よく鶏のうたふ小籔のうめの花　　戸出渡江
打やつてもどる野梅の高さ哉　　魚津儛衣
巣だちして何処に寝るやら燕め　　吉久蛙悟
牛ひとりあるかせて居るうめの花　　輅乗
黄鳥のはつ音に一座黙りけり　　保久亭
使者の間の工合ほめけり梅の花　　梅人
くれ残るものやしら帆と梅の花　　白二

二一オ

ゆふかはづきいて親子の畑上り　　〃　岨雲
杉箸の捨てあるなり花の中　　〃　可暁
挨拶のことばふえけり庭の梅　　〃　禾芳
ちるにしてくらいからゆく花見かな　　トヤマ葦村
折たうめ窓から見せて去なれけり　　〃　丈水
ついそこの田から霞むや昼日中　　〃　如寥
陽炎のたつやつゞくる壁の穴　　〃　木司
刃ものなど当たことなし庵の梅　　〃　凡丈
朝の間はあさのかぜふく柳かな　　水原乙郎

二一ウ

野のうめや瓢さげたる人のゆく　フクヲカ尺童
うぐひすの東向くときはつ音哉　〃　千束
鶴のなくかたを霞のはじめ哉　〃　霞舟
松ばかりまだきさらぎのあらしかな　〃　其嵐
手にとれば見たよりやさしすみれ草　〃　一鼠
黄鳥の啼こゑ竹にひゞきけり　〃　雪風
青柳の吹しづまれば鐘が鳴　〃　峨月
塗あげた畦に来て鳴つばめ哉　〃　文里
みちばたの一木のまつに春の月　〃　其汀

二三オ

町ばなれするより処／〻＼の椿哉　今石動芦喬
うぐひすや永う聞だにまだ朝気　加州金沢棹江
鶯の急にはこさぬ大河かな　〃　太甫
はらふ手に皆ひらつくやはるの雪　〃　一雄
炊煙のつと広がるやきじの声　〃　錦石
薄べりのかしぶりもよし里の梅　〃　角丈
三日月と影さしあふや岸の花　〃　月雄
日はうらになりてさくらの一けしき　〃　如雪
松よりは西日てらつくもゝばたけ　〃　疎蓼

二二ウ

這入らずにゆく足おとやはるの雨　曽魚
大枝に折て倦けり赤つばき　白樹
うぐひすや這入て見れば広い背戸　我龍
乞ふ人にまかせてをらす柳かな　海若
けふも又雪のけしきのうめの花　固来
うめさくや籔にもおかぬ掃溜り　超翠
気のつかぬ処から揚るひばり哉　一洞
おそろしきぬけ毛のたつや猫の恋　立介
うめさくや流れもはいる塀のうち　文草

二三オ

買たしをせぬも自慢のわかな哉　カナザハ可杏
日表を覗きまはるや赤つばき　〃　素洞
乗初の舟したてるや遠柳　〃　完和
かつぱりとかけて高みの椿かな　〃　北州
鍬間もなき菜の花のさかり哉　〃　歩兵
酔ふてからたゝきにまじる薺哉　〃　春台
駕かきの立場も長しふぢの花　〃　其水
はてしなき上戸ばかりや夜の花　〃　淇亭
床几など馳走に出すやうめ日和　〃宮越巨泉

二三ウ

田一枚のりこすはるのわたし哉　小マツ里魴
折うちにほかすのもある蕨かな　大聖寺北園
かへる雁日ごろ見たとはおびたゞし　〃　木雄
精進日に出たが不覚や山ざくら　〃　丹嶺
生垣のはしにさしおく柳かな　〃　可考
たれ過てもて余したる柳哉　能登飯田柳衣
下駄はけばはやうぐひすの立かまひ　〃　路庵
山水や植た柳をまはりゆく　トキ　松年
伏かえる戸樋またぎけり梅貫ひ　〃　花渓

二四オ

遠山や雲とさくらの間ちかし　、穴水李之
戸をさすな畳のうへの春の月　、七尾桃幼
山おくや雪のはたから咲さくら　、李下
寝ころんで詠て居るや月と花　、北我
半分は堤にかくすやなぎ哉　、楽斎
遣り羽子や無理言とほす男の子　、ゆみ女
店先や茶を汲手にも春の雪　、路蓬
なの花に合羽のくさきひより哉　、半江
蝶をまち蝶にまたるゝ径かな　、可成

二四ウ

横雲の隙から見るやみねの花　〃　淇囿
植木見に舟橋こすやはるの雨　〃　古雀
水のよい家かりたれば月とうめ　〃　市隠
青柳に念の入たる掃除かな　〃　松堂
あさ舟や黄鳥きいて横に行く　〃　閑月尾
折かねて花に恥たる皺手哉　〃　竹雨
うちの子は合点して居る接木哉　ワカサ風水
夜にいれば夜の花みせるさくらかな　丹波サヽ山竹瓦
たゞくれる紙の文庫やひなあそび　〃　田城

二五オ

ちつとほどやりばいのする小鮎哉　　丶　観之
凧提て出るや戸口の狭い家　　丶　真澄
ひくう来て背戸へぬけたる乙鳥哉　　丶　大瓢
会釈して花の真向に居りけり　　丶　野卵
梅提て二人前取る夜舟哉　　丶　野楊
駒鳥のなくや格子にちる名札　　サツキ路月
余の木から鳥も出て来て朝桜　　ヤマグニ蝸角
なの花やしきりにまはる水車　　丶　俵瓜
無理いふた男もまじる花見哉　　丶大山武陵

二五ウ

小奇麗にして人まつやはるの雨　丹后田辺とし保
横町から見とほす寺のさくら哉　〃　柳甫
出代の庭で呑茶も名残哉　〃　烏静
人おくる灯次でに見るつばき哉　〃　蕉山
ちよつと日をうけて日暮ぬ海苔筵　〃　保慶
切干の筵のうへや鶏のこゑ　〃　青草
とび込てしばしながるゝ蛙かな　〃　可也
なの花や苧桶持出す門の口　〃　白水
入相のおそし小寺の花ざかり　サンジョ車軌

二六オ

素ばなしの夜もある庵のさくら哉　宮津　本道
真下におちてあとひく雲雀哉　〃　魚道
散残るさくら翌日のはありにけり　〃　夷白
おそき日や磯の小石のころぶおと　〃　景丸
竿にほす糸のもつれや鳴ひばり　〃　はじめ
椿見に来て見付たり山ざくら　〃　文之
せつかれて折にたちけり門の梅　但馬チハラ広居
鳴ひばり引ぬくくさもなかりけり　〃　月波
陽炎や草鞋のひもを結ぶ先　〃　月亭

二六ウ

まつを曳先で出合や隣どし　伯州米子草台
山ざとや桃はさかずにうめの花　〃　沾浪
朝湯から子の日の供に成にけり　イマヅとみ女
わら灰をかぶつて鳴や田の蛙　雲州安来鶴仙
凧きれてかけに出るや店の人　松江　湖帆
あすの用までいひおいて花見哉　〃　秋宣
田隣の人の田をつむわかな哉　〃　亀年
掘て来たまつの根にさく菫哉　〃　蝉産
ちつて来て瀧壺に舞ふ椿かな　〃　文羅

二七オ

ちる花もおもしろう成酒気哉　恭羅
やどかりて花の置場にこまりけり　蝉羽
来た人におして頼むや花の留主　蝉袍
杖持た手のほかつくや鳴ひばり　蝉来
口先のもてなしぶりやはつざくら　錦羅
手に持てぬほど貰ひけりもゝの花　葉羅
花に来てきのふの場所を尋けり　蝉彦
跡じさりして咄きくさくらかな　松羅
花に出て遊べばながき刀かな　蝉羅

二七ウ

きじ鳴や水なき橋も二つ越す　〃　三千代女
買ふたほど駄賃とらるゝわらび哉　〃　亞草
献立は嫁の気まゝよひな祭り　〃　楊后
しる人にあふて火をうつつゝじ哉　〃　秀然
はるかぜや胡座かいたる馬のうへ　〃　一松
籔入の先へまはるやさかなうり　〃　山齢
土堤ひとつ木瓜より外の花もなし　〃　成虎
七草やたゝかぬうちに一笑ひ　〃　秀涛
赤過て椿もさぶき小寺かな　〃　秀江

二八オ

夜に入て二たてゞ戻る花見かな　丶　三千春
うぐひすの尾ばかりみゆる木の間哉　竹世
道者衆のくさにはらばふ日永かな　丶　仙峨
黄鳥や屋根一ぱいにはふけぶり　南峨
鶯のなくや筧にあまる水　イシリ籟芳
あさの間は籔入がちのわたし哉　モリ秀堂
見どころのあるやぶ入の祝義哉　丶　亮曠
うぐひすやうしろから来て堂の前　石州アサリ芦青
駕に日の横からさすやきじの声　ハリマ野村一素

二八ウ

人送る序に拾ふつばきかな　ヒヱ　古谷
言持て子供の来たる御慶哉　〃　水月
聟の入るくちも聞たり花の山　〃　竹逕
乙子から居りはじめて二日灸　〃　呼雖
歩行／＼ものくふ旅の花見かな　ヒラツ陸草
灯ともして土産のさくら詠けり　平福　寸錦
かはごしに揃ふてたつや春の雁　〃
大粒におもはるゝなり花の雨　〃　臥蝶
下駄の緒のゆるみ出しけり春の雪　〃

二九オ

連翹やまだおさまらぬ植処　ヒメヂ曽夢
ねはん会や生れの侭のきじの声　丶　布蘭
余所のかと見ておもひ出すひがん哉　丶　有口
牛率の小休処やうめの花　見出呂春雄
気咎のしてすてられず歯朶のちり　アカシ又鹿
岸べりにちかくしだるゝ柳かな　耕雲
一処はちるを見残すさくら哉　六英
連翹を折やとがめる障子ごし　備前西大寺茄村
万才の仕舞しごとやはなれ家　備中倉敷雲厓
二九ウ

新しき橋かゝりけりうめの花　　丶　倭一
出序に不沙汰すますや花の空　　備后ヲノミチ虎道
明た夜もそしらぬふりや猫の恋　　丶　茂兮
ちるごとにこゝろもつかず朝の花　　丶　笹兮
大空もおのがもの也揚ひばり　　丶　青樹
真直になればまばゆき雲雀哉　　丶　眠月
かは魚に味のつきけり花のかげ　　丶　東耕
ちる花にもと来たみちを忘れけり　　丶　石島
くるゝともしらで麁忽になく雲雀　　丶トモ青塢

三〇オ

青海苔のながれかゝるや鷺の足　　丶　春草

みちて来る汐やみつよつうめの花　　蒼虬

真東風になれば吹たてるちり　　青塢

火序にからびし独活も茹上て　　祖郷

舞羽と筬をとりかへてかす　　虬

だれも居ぬ床几のうへの宵の月　　塢

袂のそこにのこる栗むし　　郷

緒のゆるき温泉元の下駄のひやゝかに　　虬

三〇ウ

絵を見たなりでもどす借本　塢
まだ少し訛る大家の娘分　郷

神轡（ママ）のみちのかはるゆふだち　虬

小風呂敷さがさぬ処もなかりけり　塢
さつぱり洗ふ猫の五器皿　郷

足代も一隅とれるあさの月　虬
かまはぬきくの早うから咲　塢

引合ぬ錦の勧化の人やとひ　郷
神戸もやはり灘酒のうち　虬

三一オ

ちる花に世話しうきゆる莨の火　　塢
　釣やめてから隙な春先　　郷

花折てしばらく蝶につかれけり　　作州江見蟻道
春雨やぽろ／＼土のおちる岸　　ヒロト千鳥
老に手をひかれてもどる花見哉　　土居　月琴
うめあるも栄耀がましや谷の家　　アキ　田影
太箸やことにみやこの持ごゝろ　　丶　鶴居
出ぎらひもしつて誘ふや花ざかり　　丶　芳中

三一ウ

ちる花にこゑかけて見る月夜かな　丶　雪湖
霞日やかすまれながら野に遊ぶ　丶　茂栽
枝をれどめだゝぬはなのさかり哉　丶　雪茶
籔入や着替たまゝの水仕事　丶　貴有
葉の邪魔になれども赤き椿哉　丶　三蔦
人数だけ買ふや花見の藁草履　丶　文衣●
町のうへとは気のつかぬひばり哉　周防山口素兄
大船のだぶつきやむやはるのかぜ　丶　百古
折うちに貰はるゝ也折たうめ　丶　長瓢

三二オ

赤つばき気のへる程にちりにけり　丶　好々
ひとしきり花ちりやむや汐だらい　丶　鱗和
きれ凧に付てはしるや畑主　丶　夜白
猟好の手あきになりぬ赤つばき　筑前斗丈
余の木から登つて折や梅の花　丶　石外
ふみとめた足のとまらず蕗の薹　丶　山鼓
鳥の巣や雨の中よりみえわたる　丶　芳室
松の門日永くなりて来たりけり　丶　一丸
山の手や大きな猫の鳴歩行　丶　六合

三二ウ

あさごるのうぐひすさぶし弥生尽　一甫
しばらくは見失ひたるひばり哉　柳舎
落つばきけちらしてゆく小僧哉　如帆
土ながら舟の中にも薺かな　賈三
抱た子になぶらせておく柳かな　蛙遊
凧買ふて雨の一日永き哉　先吾
花ぐもりはなちりかけてはれにけり　猪道
燈火のおかぬ夜もあり花の宿　午湖
としよりの皺手みせるや初ざくら　遅柳

三三オ

水近う黄鳥おりるひよりかな　筑前　喜春
瀧筋は昼も小ぐらし遅ざくら　〃　玄里
貰はれてあり所しるや蕗のとう　〃　其歳
青柳やうちへ這入ば日のくるゝ　〃　時風
さとちかくなるや小まつと梅の花　〃　梧栖
独見る華や去年の旅ごゝろ　〃　蕪園
折込だ柴もぬかるや花のみち　〃　野竹
瓦焼家のうしろの柳かな　〃　籬月
わか竹や垣なき家の二三軒　〃　梅鳥

三三ウ

永き日や臼ほる側にあそぶ鶏　〃　五龍
うぐひすの来なれてけふも待れけり　〃　里月女
小火入に両手かぶせて初ざくら　〃　円竹
明る日もかけてあるなり涅槃像　〃　和風
二日めに折て戻りしさくら哉　〃　五春
折おとを寺子の告るさくらかな　〃　待必
つい足も洗はで寝たり花の宿　〃　宇逸
行先も極ず出るや小まつひき　〃　〃
うぐひすや宿のあさ寝は法はづれ　〃　月平
三四オ

下枝は垣にゆひこむ柳かな　筑前　壺天
摘だほど手にのせて来るわかな哉　〃　雨角
かけすてし屋根のはしごや凧　〃　鼠雀
腰かけた膝近う来る胡蝶哉　〃　円斎
灯ともして見るやさくらの雨の音　〃　ひな女
長閑さや乗ると火打を出す筏　〃　午湖
おりたれば余処のうち也春の山　〃　和風
日埃りの羽折はたくや花の中　〃　蒲水
一声はまくらのうへやきじの声　〃　五岳

三四ウ

しらうめや村をはなれて家二軒　丶　以春
うぐひすやひたものおりて臼のうへ　丶　肱睡
きれ凧をはづしおふせず戻りけり　丶　臥山
垣越の籔入じたく見えにけり　丶　伍省
おちてさへ其儘であるつばき哉　丶　如来
梅さくや囉ふてかざる菓子袋　丶　丹志
やぶ入のはなしにもるや籔の月　丶　其川
庵の留主つばきの庭と成にけり　丶　野山
棚田から先鳴出すかはづかな　丶　其風

三五オ

客に灯を持たせてとるや蕗の薹　筑前亀笑
爪上りするや花見のみちくだり　〃　関雫
立惜しみしてかぶりけり花の雨　〃　柏翠
戸一枚明た庵やはなの春　〃　呉鳥
しほ売の声もかすむや屋敷町　〃　月舟
木のもともさらでおちたるつばき哉　〃　梅粧
盃も下におきよしすみれ草　〃　秀木
はしり来て籠のわか鮎のぞきけり　〃　野風
歯をみがき／＼見て居る接木哉　〃　代翠

三五ウ

山ゆくや暈めされたる月のかげ　〃　鵞友
麓まで馬も来て居る花見かな　〃　野雀
うめさくやこのごろ出来し畑みち　〃　兎川
一雨に泥つくはなの筏かな　〃　如笛
出がはりや馬にも草をあてがふて　〃　由可
皆花になりてはれゆく明の雲　〃　松月
二処におきし梅見の茶代哉　〃　若拙
海少しみゆるところの花見哉　〃　自考
嗽するながれも花のたより哉　〃　漁洋

三六オ

はつ花や豆ふも作る里酒屋　筑前月橋
きく苗の礼いふときも泥手哉　〃　呂舟
指に息ふいて七草そろひけり　〃　石居
寝どころの不足もいはず花のやど　〃　素萍
雨あしに添ておち来るひばり哉　〃　石岱
うぐひすや多くは居ねど道くだり　〃　甫六
はや起し鳥屋のかどやはるの月　筑后クルメ慶五
うめがゝにいくたびふみぬ門の砂　〃　與山
筵帆も出るやかすみのはづれより　〃　千鶩

三六ウ

転び出て野の鶏卵も春寒し　　丶　米汝
膳数に盲も入てはな見かな　　丶　文老
どつしりとはやしつゞきのさくら哉　　丶
なの花にまだ降しまぬ小雨哉　　本郷樗雲
新みちの土橋普請や飛小蝶　　丶　吐雲
わかくさや国のたよりを毎度きく　　アリ鉄舟
火縄火の燃しまひけり朝ざくら　　ヒゴ正焉
うぐひすやはつ音の竹をえらびゆく　　ヒゼン田代梅調
はるの雨けふに楽寝の気あつかひ　　カラツ鷹也
三七オ

はつかはづ寝まどひもある夜也けり　丶　竹老
鳥かげにおきてさりけりはらみ鹿　丶　伝
波こして来た姿なりつばくらめ　丶　真砂
雲の根をいざ見にゆかんはるの海　丶　十寸穂
一日は傘もて歩行ひがん哉　丶　器水
人だけの杉のさし根や揚ひばり　丶　文亀
きじなくや大門あけて立て居る　丶　葵
落つばきねぶりこけるとおなじとき　丶　小挟也
つゝがなく夜雨はれたるさくらかな　丶　大鰭

三七ウ

孕鹿小川わたりてふりかへる　枝船
はるの水人ありたけの影うつる　大村太素
うぐひすの見忘れもせず垣の穴　巴南
鶯のかほさし出して磯の籔　悠々
摘て来てなぶりなくしぬ菫草　有雨
荅ある枝からも散さくらかな　寸長
しばらくはみえてありけり揚ひばり　其青
ひら／＼と背中みせけりつばくらめ　霞酔
ちる花のひとつ燃たる火入かな　神代一柱

三八オ

うぐひすやはじめてかほをみせて鳴　〃　霞林
うかゞふて居ればくれけりうめの花　長サキ甫旧
手をそゝぐ海もある也はるの月　〃　紫亭
ゆきあふた舟の正月ことばかな　諫早方居
花添て来たりわすれた小脇ざし　〃　梅逸
臼ひとつ道具に似たり花のやど　〃　石慶
翌の日の覚束なさやはなに鳥　〃　石甲
母の日も来れば眼につくすみれ哉　〃　梅乙
あさ東風や裸まいりの二三人　豊前中津其嵐

三八ウ

揚土のにほひにもつく小蝶かな　丶　春暉
夜のふけて温泉の筋になく蛙哉　国東花六
蝶一つ来てさはがしき御部屋かな　丶　素雲
風よけになつて摘せるわかな哉　小クラ木父
うぐひすやいろをあはせに苔の上　丶　松風
紙燭して見れば数なき蛙かな　丶　可推
鑓もちのおとす柳のしづく哉　丶　可由
灯のきかぬ行燈消すやきじの声　豊后日出鷺風
いま咲た色やすみれのあるが中　丶　鶴歩

三九オ

断て山吹をるやかきのそと　　丶　懸壺
蕗のとう見つけるまでの懐手　　日田石井茂蘭
遠山のさくらに出来たひより哉　　丶　其碩
散ものはしきながしけり雨の花　　丶　石露
石垣のぬけたる跡のすみれかな　　丶　なり女
仁和寺の花につけこむ餅屋かな　　彦山月枝
しづかさやすみれの影のたゞ二寸　　日田黙斎
遠眼にもそれと違はぬさくら哉　　丶　五嶺
朝膳のすんでさくらの見時かな　　丶　朝来

三九ウ

山かぜや花見のたまる窪だまり　　丶　文鵞

花守の相手になるやおそざくら　　日向ニマツ吟龍

土産にせんこのむさし野の春の月　　トミヲカさらい

沖の帆にならんでゆくや天津雁　　都城馬琴

百性の鍬もよごさずはつがすみ　　丶　琴二

うめさくやあさ／＼庵のあぶり餅　　丶　烏秋

掃たてるほこりの先のかすみかな　　丶　路白

ゆく雁の羽かぜおち来る野川かな　　丶　茶烟

茶で済す客のみくるやうめの花　　丶　一流

四〇オ

馬わたる跡になにくふ小鮎かな　一風
こしらへた隙ではたらぬ花見哉　本庄習之
水あつて柳名だかく成にけり　寿山
最そつとになつて這入らず窓の蝶　厚薄
ちよつとした所にもあるや花の橋　南丸
はるかぜや画たやうな水の面　文水
まつの花ちつとはかぜの吹もよし　梅左
背戸みちの貫ひあがりや暮の桃　立己
たゝみこむ合羽の雨や揚ひばり　由吾

四〇ウ

水田が上手にくゞる柳かな　　尚放
海原も凧のそら也日本ばれ　　〃　曳瓦
きじに夜の明て鐘つく野寺哉　　〃　連雀
珍しう乙鳥かげさす手桶かな　　阿波万像

西行庵にて

声あらばこゝで囀れはるの鳥　　サコ梅双
有がたやさくらちり込南禅寺　　〃

紀三井寺にて

あしもとに見えてかすむやわかの浦　　大モリ騏郷

四一オ

猿曳と馬とわかるゝ堤かな　トクシマ鸞巣
あたゝかな日はみず梅のちり仕舞　白地　一秀
波よけのくさ木にうれしはるの月　サヌキ其岳
宿引に笠わたしけりふぢの花　〃　今是
橋詰の燈籠くらき柳かな　トムラ楠谷
かすむ日や駕をおりれば気草臥　ヒキタ芦渓
水くさき料理場のあるさくら哉　五蕉
鍬尻のせまき垣ねやもゝの花　〃　木兆
散かたは人声多し山ざくら　〃　松堂

四一ウ

ひとつ家のうしろにちかし春の海　丶　杜麦
山焼た夜からみゆるや月の暈　丶　啄之
鳥の来て踏ぬつばきもおちにけり　馬宿椿谷
片隅に木履のあとやうめの花　白鳥李上
蝶の来て舞けり糊の遣ひさし　ツ田哦月
よい町も眼のしたにあり花の山　イヨ小マツ石漁
うぐひすの呑だやうすや木の雫　丶　一行
どう持て見ても砂引柳かな　丶　樗風
洗濯のたらいのうへのひばり哉　丶　茶隣

四二オ

一筋は浦のけぶりや夕がすみ　　丶　映門
ふるい木と誉てとほるや梅の花　　丶　女菊圃
近みちを廻れば花のうしろかな　　郡中海屋
うぐひすの足るほど鳴し春はなし　　丶　蓼村
寺のまつ凧のかゝらぬはるもなし　　ウハジマ素亭
一日は埃りしづめや御忌の雨　　銅山柴人
うぐひすの高くもとばぬ木の間哉　　天満孤龍
はるかぜにゆらるゝ鮭の天窓かな　　土佐董厓
土ながらお文箱に入るすみれ哉　　丶　一底

四二ウ

見るうちに遠くなりけりはるの海　淡スモト玄駒
どのえだを見てもみぢかし赤椿　〃
いけかへて見てもうつむくつばき哉　〃　文虫
あけ行や花に戻りし雲の色　〃　奔獅
桃さくやうか／＼と来し天王寺　〃　蝶弟
手のひらの巨細にみえて花のかげ　〃　呂川
出した箱うつむせにして雛かな　〃　一棹
昼飯をくはぬやう也ふぢの花　〃　雲耕
来る人にすれあふて出るつばめ哉　小榎並梅長

四三オ

うぐひすも来よとはくなり朝の門　西川梅堂
髭剃に出たれば桃のさく日哉　〃　如朝
来るたびに朝の様子や蔭のうめ　鳥飼回風
梅が香のもれ入にけり窓のやれ　〃　大夢
人の日や馬も見て居るくさの色　〃　よし彦
うぐひすに耳の肥たる山家哉　アナカ杜来
舟の灯の横明りさす柳かな　サノ素尤
さくら見てさびしき町も通りけり　〃　梧園
なの花や高いところに家のたつ　〃　樹々女

四三ウ

うぐひすにたつてみせたる琴柱哉　マツヲ富子
纏さげて人の出て来る柳かな　社家村桂外
夜の更て凧におどろく柱哉　スモト花由
灰ふきの研ひゞきてあさゞくら　大坂　眉岳
散花の空にきゆるやあらし山　〃　一肖
咲日より我はちるまで花乞食　〃　吐屑
大家の余計もかわぬ薺かな　〃　鼎左
おもはずもさくらのうへの朝の月　〃　青衣
あたらしき垣ねめぐるや春の水　〃　自龍

四四オ

花提し人が小足に下駄のあと　丶　草方
手分しておれ柴さがす花見哉　丶　月桂
飛付て折れるまでをる野梅哉　丶　菓翁
梢までおなじ莟やもゝの花　兵庫九梁
けし炭の徳おぼえけり花見の座　サカイ擔★

（★居偏に旁鳥）

大凧の手伝へ多き日暮哉　大和虹朗
旅立の相談きまる二月かな　下市霞暁
うち明た籠提てゆく田にし哉　ヨシノ芦洲
鐉をかけて摘さぬすみれかな　丶　先鳴　四四ウ

雲雀なく最中野火の匂ひかな　高野素水
吹上て幹までみせる柳かな　〃　閑那
ぬくさうな家の並んでうめの花　カハチ蘭里
赤つばきひとつおとすやとまり鳥　イセ四疋田宇栗
中戸まで霞のかゝる浦屋哉　〃　江月
来た跡の草より揚るひばりかな　古市蕉洞
ひくまでにむだ足つかふ小松哉　〃　花樵
永き日のおなじ姿や浜の松　山田外松
うちかへす波よは／＼しゆふがすみ　〃　鶯侶

四五オ

やつとたつ腰してきくの芽分哉　杉堂
掃た丈余寒のへるや庭まはり　四渓
常人のゆかざる山や花ざかり　蕉好
七草も一色はなのさきにけり　葵影
結たてのみな天窓也花げしき　潮花
かれ蔓のまきつきながら野梅哉　睡斎
かはづなく闇もありけり花のそと　在渕
御符出す家かくれなし木瓜の花　津団釈
花と影ひとつになつておちつばき　千町女

四五ウ

野に余り庵にもあまるさくらかな　丶　春哉
背のたかきなの花さくや芥の中　丶　芳室
はなのあるところ見付て道工面　丶　蟻扇
花ちるや外へはゆかぬ大やしき　丶　照星
居どころの勝手にとれず花ざかり　丶　ひさ世
鶯の往たりきたりや一重垣　丶　梅癩
ちるさくら薄着こらえる麓かな　丶　一幽
結んだるまゝにさしおく柳かな　丶　方汀
折気でもなくて引ぱる柳かな　丶　洒了

四六オ

うぐひすの青うしてゆく庭木哉　丶　九穂
後架へも花のちりこむ泊り哉　丶　竹外
おくれては走りまじるや花の坂　カメ山李堂
みち／＼も花のはなしや花もどり　丶　如水
黄鳥の高音や谷の澄わたり　丶　扇月
人まして草餅いはふことし哉　丶　一笑
ほろゝうつきじや春田の土けぶり　丶　卜子
はるかぜや賑ふさとの這入ぐち　丶　里水
木の間なき程にさきけり山ざくら　里泉

四六ウ

なの花の中や一筋ぬかりみち　イガ　猪来
棟上のあふぎの側のおぼろ月　ヨド　吟風
海棠や其場で直に眠う成　〃　魚物
うはつらは別のやうなり春の水　〃　鴬語

籔入の暮してはいる在処哉　太老
ちら／＼森をもるゝ山焼　可大
灰汁をぬく蕨を川に漬置て　老
おふほど椽へあがる鶏　大

四七オ

朝の月市場の掃除いそぐ也　老
　藁までおもき出来どしの稲　大
めつきりと橙きばむ南うけ　老
　雑蔵ばかりたてる抱地　大
おなじことといふては酒の長たらし　老
　なんでも人にくれる発心　大
あつき日は宮のわたしの思はるゝ　老
　薄い手紙の皺は直らぬ　大
髪ゆひの往もどりにもおとづれて　老

四七ウ

つよき吹雪に用をこらえる　大
移り香のこたつぶとんを刎かへし　老
目のさめ次第遊ぶ温泉入衆　大
月花にちく／＼籔を伐ひらき　老
御扶持てたらではるの買食　大
うぐひすを残して鳥は皆放し　〃
井戸のぐるりへおろす植木荷　老
宿替にちよつと手伝ふ両隣　大
笑ひをつゝむ顔のをかしき　老

四八オ

夏うちははやる薬師の朝まいり　大
　金見せかけて直ぎる軸もの　老
結構な空に唯居るかゝり船　大
　本家の用は否をいはれぬ　老
ふさいだら明ぬつもりで窓を塗　大
　ひとしめりまつきくの植替　老
入際に月さすのみの麓まち　大
　まつりのすんで馬糞かく音　老
うつ／＼と眠気のとれぬ旅もどり　大

四八ウ

膳をひつぱる孫の可愛さ　老

普請中上下なしにはたらいて　大

不断はしごのかけてある松　老

花のちる日から天気のつゞく也　大

砂にこぼれてふせるわか鮎　老

きえもせずすみれ花さく柱の根　京月峰

是非翌日といふまでになるさくら哉　金菜

結ばるゝ程たれてある柳かな　正阿弥

四九オ

はつ花や皆ういてある池の魚　梅笠
雲雀見たまゝつぎさます冷茶哉　若雅
何まつて居るぞ弥生に残る雁　羅浮
黄鳥のなまりとれたる天気かな　芳英
薄雲や花にまのなきあらし山　一喬
雫あるうちに日の出てはつざくら　南渓
柿の葉の其まゝありて蕗のとう　南渓社卓雄
舟先に山見え出して雉子の声　〃　柳清
紅梅の咲過てあり町はづれ　〃　花笠

四九ウ

宝引や負ふて居る子も数の内　翁杖
不器用に銭つぐさまも花見哉　瓶山
梅どきはうめもある也あらし山　几乙
山吹や村をはなれて一構　伴橘
水音の溝にもあるやおぼろ月　酔露
ちる処でわざとものくふさくらかな　魯斎
うぐひすの踏や生干の小土器　馬角
一めぐりして田に入ぬはるの水　馬友
暮る日や一声かはす島の雉子　光影

五〇オ

なの花に旭さしけり向ふ高　衆芳
一しめり受て声よき蛙かな　喜楓
うぐひすや雪などかまふふりもなし　玉叟
ちよひ／＼と見て戻りけりふぢの花　草烏
明きらぬ山の麓やきじの声　枝月
ひとつ着になつて出直す桜哉　梅價
末白うなるやみどりの小松原　梅通
なの花や先籔ばかり日の暮る　芹舎
一日は着替ずに出る花見かな　並隆

五〇ウ

手をかけてそつとはなすや花の枝　丈翠
花持た人におはるゝ小橋かな　黙池
草臥た顔で舟呼かすみ哉　杜蓼
一度ではおかれぬ花のあらし山　岱美
古寺やさくらありての池ざらへ　太老
かたへらはあら壁なりやうめの花　★士

（★車偏に旁石）

畦みちをまはりて見るや春の水　梅一
觜ぬぐふ鴉のおとすつばきかな　杜鷲
煤くさき障子はづすや初ざくら　蘇山　五一オ

落付のしばらくさぶし花の山　初六
手のあぶらふく鼻紙や花の陰　祖郷
波先をかぶるやきじの出たはづみ　呉明
赤いとて立寄る茶やのつゝじ哉　可大
間／＼によき畑あつて山ざくら　有節
紅梅やことしへ入てぬくき雨　朝陽
戸を明て皆畠うちや一在処　万籟
日はみねにかくれて花の盛哉　蒼虬
うか／＼と深入したり夜の花　千崖

五一ウ

追加

雨雲のはれて夜明やきじの声　イセ　亀洞

海一ぱいにわたるはるの日　良明

はちくれる出代荷物へし付て　宇栗

つゝむにあまる蛸のゆで立　洞

しつかりと月を受たるまつの枝　明

丸木の橋をすかす虫の音　栗

五二オ

雪汁はたぶ〳〵来るに草の霜　岱年
掃跡の砂にのこるやまつの花　分来
水汲に出て垣ごしの御慶哉　イセ　宇栗
ふりあげた鍬にかゝるや凧の糸　〃
一色で七草すます山家かな　近西湖南明
腰のして見おろす谷のさくら哉　〃　北居
かへるとき揃ふて啼や春の雁　〃　南居
とく〳〵とはるの落つく山家哉　〃　久嶺
大事になる折やうやふぢの花　ノト　梅明

五二ウ

ちつとづゝ始終かげもつすみれ哉　アキヒロシマ十墨

朝の花見て又寝るや庵の客　カヾ金沢宇牧

出代の皆に言伝のこしけり　遠州カケツカ青江

見て居ればゐらるゝ花の薄着哉　甲州　道等

出てはるを惜しめば寒し垣の外　丶　雲里

声やまじ花のさく日の明がらす　近五十川節外

笠程に成て入日やきじの声　筑后　吐雲

やどり木も添てめでたき子の日かな　イヨ　井峨

滞なくながれけり春の水　イセマツザカ升山

五三オ

見違ふて名をおぼえけり蘭の苗　丶　夜白
足袋の緒の解ておくるゝ礼者哉　出雲安来秀然
ころがつた丸太の中やなく蛙　近江八マン桃谷
鐘近うきこゆる春のさぶさ哉　丶　里雪
朧月おぼろはなれて入にけり　丶　梅井
指折て遣るあてをするわかな哉　丶　素白
掃ざるも馳走やうめのちりかゝり　丶　蘭陽
それのみに出れど夜に入御慶かな　丶　霞陵
手に提てもどるみちにも梅の花　丶　可拙

五三ウ

蓬莱やさすが童もよりそはず　丶　東山
少しおくにならべておくや母の雛　丶　麻中
きじひとつ只居る門のはたけ哉　京　采桑女
あさゝむに一際たちし野うめ哉　丶　麦菜●
春の夜やいはれてからの寝ごしらへ　アハ露泉
つけ髪をおとしておくや花の中　近江八マン夜外
道下手も人目にたゝず花もどり　丶　道雄
断て畠とほるやはなざかり　丶　子屯
借傘にこぞつて花のもどり哉　丶　蒲丈

五四オ

ゆるがせな何処も暮しや花の空　丶　芦洲
わかな摘人みえそむる木の間かな　大溝　一居
寝過して侘いふやどや春の鐘　土山　虚白
鍋の炭かいた跡ある雪解かな　ハリマ魚崎節之
おれた枝なけれど梅のこぼれけり　江戸　素撲
あそこらは見付のそとか凧　丶　芳居
精進のうちはひま也はるの雨　イセ山田文外
突張の高うてきかぬ柳かな　ミカハ水竹
居押れて下戸側に入る花見かな　ヲク二本松文骨

五四ウ

春かぜや酔ふて戻るによい堤　イガ春扉
新田にやがてうれしきかはづかな　〃
はつ花や見る約束の出来ぬうち　〃
鐘かすむ日やうろ／＼と啼からす　〃　梅雄
傘の不用になるや花もどり　〃　梅旭
封きってひらく扇やはつざくら　〃　芦郷
籔入をのせてもどるや薪舟　〃　金波
うぐひすの来て嫁も見るとなり哉　〃　蕩州
鶏もよごれに出たりはるの雨　サヌキイセキ止柳
五五オ

小流れの水とばしけり落つばき　丶坂本寿専

山焼や池に影さす仕舞口　イヨ　葵笠

いつ暮てともし灯ひとつ花の中　大坂　真起

かへる気のつけば小寒し夕ざくら　丶　樵山

五五ウ

京東洞院仏光寺上ル

御摺物所　菊屋平兵衛

（裏表紙見返し）

（裏表紙）